遞信省認可

明治二十年八月十三日發兌

いらつめ

第貳號

目次

例言

本誌の目的は婦人の職分を全くし、令徳を進め、及び地位を高むるにあり、家政の欄には一家を調理すべき方法を載せ姫鑑には令徳を進むべき佳話、賢傳を載せ、雑錄には美術に關する事項或は交際の心得を載せて優美高尙の風を養ふべし、その他時時の要報及び評論を掲ぐるものなり、

毎月第二土曜發兌○一冊定價金八錢○六冊前金四十五錢○十二冊前金八十錢○府外の分は郵税申受郵券代用御斷申上候

持主兼印刷人　新保磐次
編輯人　正木政吉

東京本郷區湯嶋天神町壹丁目五十九番地
發行所　成美社

同神田區雉子町卅二番地
大賣捌所　團々社支店

いらつめ

女子の地位を進むるに付ての注意。

余儕は本紙の趣旨に於て維新以來女子教育の思想に付き略變遷の狀態を陳べたり。蓋し明治年間日本文化の變更は實に珍らしきことにして、上は政治、教育の本より下は衣食住の末に至るまで悉く其面目を新めざるなく、仮し其内部に立入りて國民の性質、精神上の發達に付き精しく探れば或は一見せしのみにて思量りしが如きものに非ざるべく、其變更の程度に至ては未容易に之が判斷を下す能はざるべしと雖、兎に角外形上及物質上の開化に付て之を見るときは維新以來の激變は世界の歷史中絕てなくして稀に有る所なるべし。女子教育のごときもまた然り、啻に然るのみならず、就中進歩の最著く激變の最甚しきものあることを世人の皆許す所あり。數百年間壓制と專橫の下にありて不平を訴ふるよ所なく、其教育のごときも極めて淺薄にして更に深

く人の注意する所とならざりし婦人は一朝にして其体裁を更め日本文化の必要なる元素と考へらるゝに至れり。而して此有より無に變じたる大改革は凡て是僅僅二十年間の事業に外ならず、其變遷の劇き事實に人をして目も眩ましめんとするものあり。

飜りて此急劇に革まりし原因を考ふるに素是外より來りたるものにして、内より發したるものに非ず。物質の內部に在る自然の發達力が時の進むに從ひ漸次に外形に溢れたるものに非ずして外部より劇き刺衝をうけ、恰反射的の機能のごとく、未之が好歹を究むる暇もなく直に其誘導に從ひたるものなり。學術上の語を仮りて之を言へば、明治年間の進歩は必生的の進歩にあらずして層生的の進歩あり。千百年來邦人の逞ふしたる華胥の夢想は一聲汽笛の為に攪られ、眼を開きて四方を見れば四海の內、六合の間、凡て是舊來の天地にあらず。邦人思想內の地圖は俄に廣大なる新版圖を加へ、而も此版圖は其文化の度遠く舊來の版圖に優りたるものなり。蓋邦人の始めて歐人に接するや、早く已に其新奇に驚き、其後交際の愈々親密なるに從ひ、歐州諸國の

壯觀美風を慕ふの念愈々強く取ることを得るものは直に取り、擬することを得るものは直に擬せ、只其取るの少く、擬するの多からざるを是恐るゝの狀あり。而して此直に取り、直に擬する結果は即明治二十年の開化なり。女子に關する習慣風俗の如きも其急進劇變の甚しきこと今日の如くなるは全く此外部の刺戟の致す所に外ならざるなり

以上陳ぶるが如く維新以來の開化は層生的の開化なり故に徒に外形に拘泥て玉石を混淆することなき能はず。明治年間の進歩は急激の進歩なり、故に只進歩の一点にのみ目を止め之に伴ふて生ずる所の害に至りては深く之を問ふことなし。婦人の地位を進歩する方法に就ても世間或は女子に獨立の財産を與へて以て此目的を達せんとする論者あり。是素より地位を進むる一方便に相違なしといへどももし此方法にして實に行はれなば社會の圓滑と一家の幸福の上とに如何なる影響を及ぼすや、深く是等に目を着くるもののなきは余儕の憾む所なり。これ余儕が此に論題を掲げて婦人の地位進歩を圖るものゝ注意を呼起さんとする所以なり。余儕乞ふ次項に於て濫に虛

形を擬することの危き由を論ぜん。

夫進歩の實質は變化なり、開化の生命もまた變化なり。變化にして一朝其跡を絶たんか、恰人間に脈搏の停りたるがごとく、恰草木に液汁の循環なきがごとく、社會ハ一大死物たるに過きざ、何の進歩か之あらんや、何の開化か之あらんや。 内外相和し、名實相應じ、外形に顯るゝものハ内必其理あり。名ある者ハ實必之に應ず實なき名、理なき形は直に之を變改して其實に合し、其理に適せしむ。 是則進歩の由りて來る所、開化の由りて起る所なり。而して彼虚形は人間の動作を一定の定規の内に抂げ、之が自由を束縛し、之が變化を碍げて以て彼進歩の實質、開化の生命を奪ふものゝ外ならず。 抑習慣を守るに二樣あり。 其便益あるが爲に守るもの其一なり。 單に習慣なるが故に利害の如何に關せずして之を守るもの其二なり。 便益あるが爲に守る習慣は便益の止むと同時に其跡を絶つべしと雖、單に習慣なる故を以て之を守る習慣は假令之に因つて利を効さゝること明白なるも之を改め、之を正すよ由なし。是即かの恐るべく、厭ふべき習慣の壓制なるものゝ由りて起る所あり。 習慣

風俗已に此の如く利害と全く離るゝときは假令其習慣は如何程文明の外觀あるとも其風俗は如何程開化の臭氣あるとも其所謂文明は生活なき文明なり、其所謂開化は精神なき開化なり。之を見て其美を賞するは則之あらん、然れども其美は之を繪画の美に比すべく、之を彫刻の美に比すべからず。

翻りて我邦維新以來女子に關する思想の進歩と見るに余儕が已に述べたる如く層生的の進歩なり、外部の影響を受け、內部の力に關せずして起りたる進歩なり。それ東西全く域を殊にし、彼此全く習慣を異にする兩人種にして始めて相接し、始めて相交はるに當て、互に耳目を驚かすの最甚しきものは何ぞや。其表面の開化に非ずや。其表面の習慣に非ずや。而して開化の差異愈大に、習慣の背馳愈甚しければこの感觸の愈深きは素より自然の理なり。

歐米諸國男女の間に行はるゝ習慣を見れバ女子を遇する事の厚き、單に外形に就て之を言へば或は人をして女尊男卑に非さるやを疑はしむるものなきに非ず。之に反して我邦にありては數百年男は父のごとく、主のごとく其習慣一として男の尊く、女の卑きを表さざるものなし。彼の男にして女子に

對して氾上の張子房を學ぶがごときは邦人の未嘗て夢にだも見る能はざりし所なり。是を以て邦人の始めて歐人に接し、其後交通の稍親密にして、彼此互に習慣を知るに至りてや最邦人の目を驚かしたるものは彼の女子を尊ぶ習慣なり。而して其後盛に歐米の習慣を輸入するに當りてや、最邦人の注意をひきたるものも亦此習慣なり。蓋歐米男女の間に行はるゝ習慣は素弱きを扶くる精神に出でたるものにして、其意素より嘉すべきものなきに非ずと雖、單に表面の習慣を輸入して以て直に婦人の地位を進捗したるものと見做すに至りては則誤れりと云ふべし。彼の大人の小兒を弄ぶを見よ、之を抱き之を舐り、之を捧げ、之を戴き、寵遇愛親至らざるなし。外形のみに付て之を見るときは歐米男女間の習慣は稍此小兒を遇する狀に似たるところなり。試に退きて親友の間の交際を見よ斷琴の情は胸に充つると雖、表面より之を見れば其相遇する狀彼の小兒を遇するにしかざるがごときものあり。誰か親友に對して氾上の張子房を學ぶものあらんや。それ夫妻は親友の最親きものなり。而して其待遇の狀却りて此に似ずして彼に似たるは何ぞや。古來

邦人は女子を以て男子の玩弄物とせりとは世人の往々云ふ所なれども余儕を以之を見れば女子を奴隷としたるは其或は之あらん、之を稱して玩弄物とせりと云ふは則未し。何となれば邦人の女子を使ふは如何程虐しといふも其目的は常に實用にあればなり。然れども若彼の歐米習慣の骸骨を輸入し單に其外形のみを取るときは是即彼の小兒を遇すると一般、女子を玩弄物とせる弊習を實際に演ずるの不幸なきや余儕の深く恐るゝ所なり。且夫れ余儕が既に述べたるがごとく、道理と利害とを離れて單に外形を似するときは遂に文化の發達を碍ぐるは理の爭ふべからざるものにして、男女の關係のごときも單に習慣なるの故を以て、其道理の如何に關らず之を輸入せば眞正の改良は之を何の時にか望むべけん。余儕の論ずる所此の如しと雖、余儕は敢て全く女子を尊ぶ習慣を採用せるを不可なりとせるものにあらず、唯其虛形を似せて以て直に婦人の地位を進捗したりと誤認することなく增々進んて眞正の改良を圖らんことを希望せるものなり。殊に明治年間の開化は余儕の第二項に論せしが如く、外部の影響に由りて生じたるものなれば余儕は愈々

前條注意の緊要を感ずるなり。而して第二の注意及び女子眞正の地位を得るに付余輩の意見の如きは第三號に於て之を詳述せん。

月報

○東京金蘭會。國の文明を得んには男女交際に因らざるべからずとて去月十日芝紅葉館に於て東京金蘭會の第四會を催されたるが、會社は男女併せて三百人に近く其規則として男女全伴にして來る者を何人にても會員たる事を許さるゝ趣なればバ右の中には學者もあり職人もあり商家の細君もあれば貴顯の令孃もあり餘興には音樂演說(新作の唱歌は雜錄欄內にあり)なども有りて中々の盛會なりし由。追て其第五會は來九月に開かるゝ趣にて、第四會後いまだ僅に一月の程なれども會員の數は最早前よりは非常の多數に上りたる由。右幹事は麴町區飯田町三丁目の石橋氏にて所望の人へは郵券受取次第仝氏方より該會主意書を贈らるゝといふ。

○東京女學。今度芝區櫻田兼房町に設立されたる東京女學と云ふは速成

を旨として女子に適切なる學術技藝を敎ふる目的にて、早くも飯田町邊へも分校を創立せんとて地所搜索中の由。

○女業學校。伊藤伯爵夫人などの發起にて今度題名の如き女學校創立の計畫ありといふ。

○華族女學校は先頃より校舍建築に取掛りたり。

○婦人の會合。筑後國三池郡江浦町なる有志者の發起にて江浦婦人協會と云ふを組織せられたる由。又た岩手縣下盛岡にても諸官吏幷に紳商豪家の夫人令孃の發起にて婦人會と云ふを催し毎月一回の集會にて家事、經濟、育兒法及び學術上の談話などあると云ふ。

○從前の交際法。ある老人の物語に「自分共が壯年の頃には悴の朋友が尋ねて來るとか主人の知己が訪ふとか云ふ折には細君は云ふ迄も無く家族のものも交々其席に列り種々の浮世ばなしなと爲て來客を慰むる事一般の風なりしが此頃は全く其と反對にて男女交際は必要ぢやなどゝ云ふ人は多けれど却て其家內の有樣は大に相違し、夫の知己よ細君が出て饗應するなどめ

事は先稱なるが如を見れば男女交際の有様もどうやら些往古より退歩した樣に見ゆると。誠よ一理窟あるが如し。兎角交際は眞實を旨としたきものなり。

○神戸手藝學校。 當校は事務も追々整頓せしを以て來る九月一日に開校を行ふ趣にて目今は假に開校せられたるのみなり。

○鴨沂會。 是は京都府女學校の卒業生が舊好を尋ね互に智識を交換し休戚相助けんとの目的にて設立されたるものにして、討論、諮詢、演説などもあり毎會また雜誌をも發刊せらるゝ由

○通俗婦人講談會。 女子の教育を進めん事に熱心なる紳士貴女が今般題號の如き講談會を組織し、其第一回を來る二十一日(第三日曜)午後三時より麹町區元園町元園小學校に於て催し男女數名の講談者出席して極々平易に講談せらるゝ上猶歐州樂の合奏などもある由にて傍聽は無料また通券をも要せず、たゞし傍聽人は婦人に限ると云ふ。

○社員派遣。 弊社編輯人正木政吉を社用にて京坂地方へ出發せしが、行先

各にて懇篤なる待遇を蒙る旨通知あり。因て本人に代り其向の方々へ厚く御禮申上ます。

○女學雜誌、同第六十七號の雜報にて弊社のいらつめ趣意書に付き有難き注意を賜はり、其の最良の朋友なることを認むる旨の御吹聽をも受けたる段、社中一同先は光榮と宜しく御禮申上げます。

○靜岡通信、靜岡にわ師範學校女子部及び小學校の外、いまだ女子に學藝を教ふる所なし。女子部には生徒三十二人ありといふ。衣服は皆洋服なり。女子にして教員たる者わ無し。束髪は四月頃より流行し初め目下は餘程盛なるが殊に生徒に多し。洋服を着するものは學校生徒の外には無しと云ふも不可なし。

姫かゞみ

風琴調一節　　美妙齋主人著

第二曲　「打水の晝の暑を忘れてし雫の山の草の葉に月も宿りて涼風の添ふて澤邊に鳴く蛙更けてたよ〳〵飛ぶ螢…（打水の）

一日の閑鳴暮らした骨折やすめとて梢の蟬は忍寄る夕脚を合圖に大概聲を收めて葉隱で露の森酒を飲出せば今度は草葉の螢が其跡を繼ぎそろ〳〵散歩の支度をして遠近を飛回るもの、其中で弱いのは時〻風に吹捲られ羽も利かず彷徨などは誠に床しゝ風情であつた。夫ばかりでも夏の夜の價値は十分だのに今夜は月の桂男も雲と云ふ惡徒の從者をば連れず、只冷たそうに澄亘つて白壁の色を青く染め、木の葉の上に珠玉を貸し、天地を磨上げた有樣、一目見た斗でも汗の神も人の肌膚から逃出し、涼しさと云ふ御客樣が臨の中へ入つて來る程で有つた。春宵が千金なら此樣な夜もまた千金である譯「蚊を疵よして五百金」とは些し苛酷な論評た。鼻を塞いて食へば葱も林檎も全じ味さ、無心で見ては牛の糞も鯛味噌さ、乃至春宵は千金と云ふ考を先入の主とした眼では決して此夏の夜の風情を確に認める事に出來ない、公平の眼で夫を見てこそ始めて眞正の價値も知れる。無駄な理窟は兎にも角にも業合つた植込の横手よ在るのは白ペンキ塗の建物で新築の二階造、空氣流通の好い樣に南の廊下は殘らず明拂はれて、月も自由に照込む許可を得たから、泥

に塗れた床板も今夜ばかりは大理石と見えた。其處には取締が能く行屆く故か、騒がしい物音も無く、たゞ音を讀む聲と時々笑ふ聲とが僅に「寂寞の帳幕を破つて聞えた物の、其聲は渾べて鈍い調子で無く、音樂で言へばバス、クレフ（Bas Cle）生理で言へば聲帯の隙間が細い質であつた。と言へば大抵分解る、是は即ち阿角や阿丸が居る女學校の寄宿舎で扨此處の欄杆に力無さそうに凭掛つて單一人月を眺めて居る者は別人でも無く此前は初めて皆樣に御近付になつた江本阿角サ。

生壁に算盤を敲付た樣な痘痕顔でさへ月夜にゝ肌理細に見えると云ふに、阿角は倏れた色白で殊に皮膚は出來たばかりの牛皮餅も三舍を避ける程だから、いとゞ今夜は其白さが濃く見えて寧却つて蒼白かつた。但し物思を爲て居ると見えて眼の働が平常とゝ違つて何處やら勢が無く、折々出る溜息が其代に烈しかつた。傍に人は見て居ないけれど、横の方から吹いて來る氣障な風に裾を翩々吹捲くられるのゝを厭つてか……嗚呼可愛らしい……腰を屈めながら身躰の位置を易へ、而して些し首を曲げて左の指で鬢の後毛を密と拂

ひ、直に其手で後の髷を一寸(癖で)いぢつた其風情なら豊国が絵筆を四五本費したに違無い。それから再回欄杆もだれかゝらず蚊を撲ふとは名ばかりな團扇の縁を瓠犀の前歯でコツ〳〵と静に噛みながら寔刻の間は何を目的と云ふ事も無く無言で其辺を眺めて居ると誰の調か分解らなかつたが遥に隔たつた音楽室の方でピアノの音がはじまると思ふと寄宿舎の大時計も九時半を告げ早何処となく夜も沈々となつて来た。處で何角も何と無く悚と為た。是は哀が身に浸みた証拠で、サア今迄は夫程で無かつた胸の思が燃ゑて来た。……

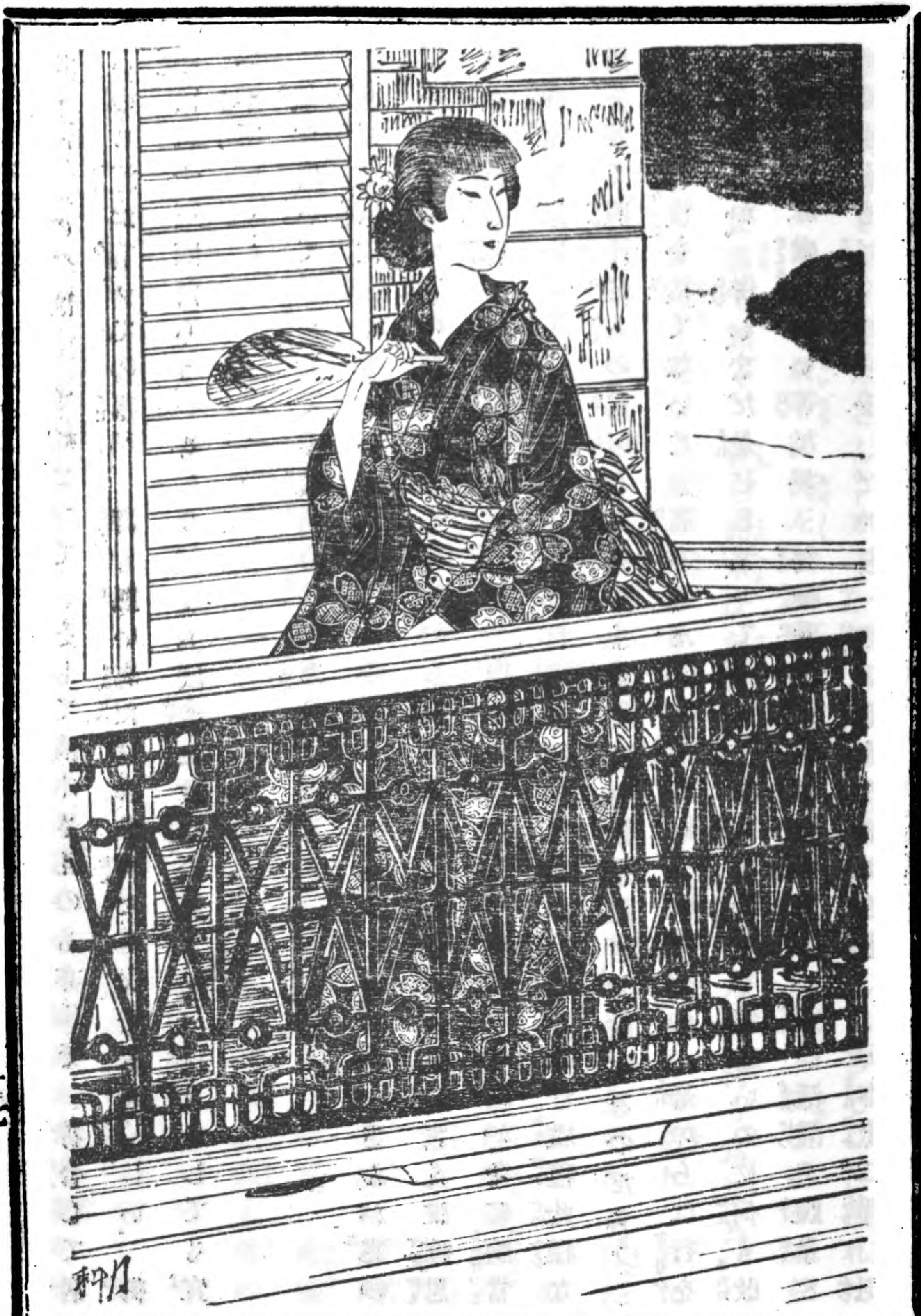
「あゝピアノ〳〵……誰が調べるのか知らんがアノ少し言へば昨日の風琴……風琴を言へば那の高木さん……大層奇麗な、能弁な……御年は幾歳でもあつたらう。那人は演説の中、三度ほど妾の顔を見て……生憎昨日は妾の半様が悪かつたから……あゝ夫を見られたか知らん。此間買つた襟留めに為れバ好かつた。併し妾の顔は相照鏡で見ても真向よりは斜向の方が好いので、昨日も故意と下を向いて居たから、屹度好く見ゑたらう!! それならば先生心だが夫に付けても

阿母さんが……高木さんの歌で聞いても母が子を思ふ心は那程。夫だから阿母さんも妾の身を御心配なさつて、伯父さんの仰やつたのもシテ見ると間違無かつたか知らん。それで阿母さんが御歿みなすつたなら左様、妾は大層な不幸者だ。あゝ阿母さんが成程々々……妾が東京へ留學に出て來る時那の停車場まで送つて來て下すつて……あの眼に涙を一杯御溜めなすつて……泣く樣な笑ふ樣な御顔を爲すつて「阿角それなら」と仰やつたばかり……那程可愛がつて下すつたのを……マ、それて御歿りなすつて……エヽ妾は今迄何してマア妾は今迄、何故、マア、妾は今迄、氣が附かなかつたらう。あゝ悪い事を爲たつけナア」。

今は阿角も堪兼ねて涙をハラ〳〵……斯う云ふ内にも心の中へ一種の曲者が忍込む、

「だが高木さんは身体に品格が有つて……一寸あの歌で聞いても、一寸あの辯で察してもなる程世の人が云ふ通り本當に才子だ。聲まで御清亮で……高木景遠とは名も悪く無い。妾の苗字は「ねもと」の三字、那の方のも「たかぎ」の三字





其上に妾の名はKAで始まつて…そして高木さんのも亦KAで…符合して居るのも縁が有ッての事か。譯も無い考だけれど何だか夫でも必と嬉しい。御年は二十三四だらう。もし廿三ならば妾には六の兄さん…匹人としても宜い年頃…………

氣が附いて思直しても兎角心は兩方に走ッて、

「其樣な事は何でも好いが、阿母さんの事を思へば…それも高木さんが那の歌を聞かせて下さッたからの事、だから高木さんは…否々々々阿母さんは應思へば今更勿体…オヤ痛い、胸が、腹が…伯父さんが止めるのとも聞かずに胸當で身体を緊め〳〵…オゝ痛い…まだ慣れぬ故ではあらうけれど成程此樣な思を爲て西洋婦人の眞似を爲るから鼻の先の智慧だと云はれるのだらう…けれど胸當を當てないと…高木さんの御說は何うか知らん。是からは行を改めようか。併し、まだ是ぞと云ッて歹い、生意氣な事をも爲ないのに何も改めると云ふ處も無い筈だが…勿論兎角此時世の者で無い人は活潑と疎暴との區別をも好く知らず…だから一概よ老人の言ふ言を…菊本十二郎…風

琴……阿母さん……高木さん……才子……まだ御獨身。　アラ我ながら心は汚穢れた物親を想ッて居る最中に仇々しい事も思出されるとは……「鏡に映るものならば」に本當に嘘で無く。　併し、此末は何したら……ハテ困つた……何う爲たら」……

思詰めては心も沈んで愈々顔にも勢が無くなり、只茫然として居た。　實に此時の阿角の心は水の上に浮く泡全體、右へも付かず左へも寄らず、たゞ右にも爲よ左にも爲よ引力の強い方に傾かうと爲て居たばかりだ。　此處が極めて大切な處だ。　最初阿角は母の忌日よ伯父よ異見を爲れたので自然懷舊の想像も些しは胸に浮んだ其上に折好く影遠が唱歌を聞かせた。　元より此唱歌とて何も深く母の心を描出してある物では無かつたが唯ソレ其處に阿角の心には懷舊ノ情ノ下地が出來て居たので殊よ強く感動されたのだ。　此機會を失はゞ最う一ッ有力の感動が阿角の心よ與へられたなら先斷然と舊の心を飜へす事だけは出來るに違ないが惜い事にはまだ其物が無かッた。　今の處で其物と云ふは高木影遠であッた　併し高木もまだ阿角の知人でもなかッたから今直に役には立たなかッた。　殊に阿角の心も何處が何で惡かッ

たやら、何處が圖で眞正の婦人やら知らぬ、言はゝ只世の狂濤に連れられて遂に我梶を取損ひ方角の違つた濱邊に打上げられた斗の事ゆゑ、途方に暮れる斗であつた。 猶夫ばかりでも無くて、自分を諫めた人が相憎老人であつた處から自然夫をば時事に暗い者と一概に擯斥して仕舞ふので、其諫言を納れる事も斷然とは行かなかつた。 洵に痛し痒しの間。 實に自由にならぬ物。 子弟を敎ふる人々はよく／＼御思案なさいませ。

處へ阿丸が……來ずとも宜いに……出掛けて來た。 噫是では最う無駄だ。

(丸)「アラ江本さん、御一人ィ……好う厶いますヨ、皆さんに左樣言ひますから」……

(角)「何故久保田さん(阿丸の姓)」。

(丸)「何故だつて貴娘、貴娘ハ昨日から御塞ぎなすつてばつかり……中村樣の……チエ……たゝかゝぎゝさんを……マア止しましようヨ」—

(角)「否ヨー……あんな事を」……

(丸)「虚うゝそ……皆さんが最う御存知ですヨ。 匿すもんぢや無くつてヨ」。

(角)「だつて、それは」……

(丸)「だつて、それは何為たノ。ソーラ矢張り高木さんだワ。」
(角)「アヲ否ナ……此處で涼んで居ますのに、そんな事ばつかり。澤山仰やいヨ
最う妾は此處で涼みませんから」
(丸)「そんな事を仰やつたつて……だつて譯を仰やらないんだものを。」
(角)「ぢやア云ひやしようか」。
(丸)「エヽ仰やい」。

問詰められて仕方無く、阿角は唱歌を聞いてから感動された趣を概畧阿丸に告知らせた。告知らすと案の如く悪魔の雲が湧いて來た。

(丸)「オホヽヽ、左樣、マア、それは貴娘違つて居ますワ。其位の事を御存じて無い貴娘でも無いのに……否サ成程婦人の洋服は腹を緊く縛るから大層身体の害になるとは西洋の醫者も云ふノヨ。けれど其樣な事をば成るべく俗人に聞かさるもんぢやア無くつてヨ。其樣な事を俗人に聞かせると、夫を好い口實たして矢鱈よ洋服を排撃する者が殖て來て、ソヲ或る外國人が日本の往昔方の服を見て眞に美術の道理に適つて居る服だと褒めた事など迄

が世に知渡つて来るんだツ。　左様為ると、夫が大変な邪魔になつて……那の此頃出来た雑誌の様な妖怪が出て来ますそツ、其様な事に屈服しては女権擴張なんぞは迚も覚束無い事ヨ。　黙つてゐつしやい。　構ふもんですか」。

(角)「デモ久保田さん妾の母はネ」……

(丸)「母はネを仰やるけれど、それが卑屈と云ふもんですそツ。　ナニ、阿母さんが御歿りなすッたッて、貴娘が阿母さんを御殺しなすッたので無いから何も心配する事は無いノヨ。　嫁に世話を為る者も無くなるだらうと伯父さんは仰やッたッて、夫こそ本当に時世を知らない説だツ……ヘシ自由結婚と云ふ事が有りますそツ。　他の世話に為らないでも」……

(角)「しかし貴娘、自由結婚はまだ日本の様な道徳の考が確固と人の心を支配する事が出来ない世には大害が有る計かりで、夫から出る利益などは迚も夢にも」……

(丸)「夫は二三の論者の説だツ。　けれど妾は其説には……貴娘、アノ日本よりは遥に宗教の束縛が有る西洋諸国でも其内實は大抵離婚が……だから醜風も

澤山有るノヨ……是は人情ゆゑ仕方が無いワ……ホヽヽ……江本さんだから話しますが」……

阿角の耳へ口を寄せ、暫刻何か囁いて、

(丸)「マア自由結婚などと云ふ名を附けて体裁を繕ッて置く斗だワ」

(角)「オヤ左樣。其でハ貴娘は」

(丸)「矢張りMissで」……

(角)「マア何も」……

(丸)「ホヽヽ、ヽ」

餘りと言へば極端に走ッて何も角も無茶苦茶に爲た議論ゆゑ、此處で始めて江本阿角も膽を潰すほど呆返ッた。今迄は阿角も阿丸からまだ此樣な過激な論をば聞いた事も無く隨つて阿丸をば無二の友と思ひ、その眞似を爲て居たものゝ、有繫に猶心の裡には良心が殘つて居たので今此樣な暴論を聞いては其を信ずる妄念も薄らいで來て何處やら阿丸が憎らしくなつた。實に阿丸が此暴論を今斯ら吐出したは阿角の爲には非常な利益で、サア憎ら

しいと思ふや否や、今迄の阿丸の所業が皆面白くなく思はれて、其極竟に其反動で烈しく母や伯父を想出す心も出で來た。其樣なると其がまた一個の原因となつて阿丸と口を利くのも否になりまた愈阿丸の持論を疑つで來る心も熾になつた。

それから阿角は憎らしさに無言。眼の中には白眼の領地が加增になつた。阿丸はまた手持無沙汰に無言。口の中からは感歎詞が續々と出現した。折から鳴つたは十時の時計、氣を利かせて物別の催促。やがて二人は臥床に入つた。阿角は些しも眠られなかつた。時に……何も驚いた……宿直の者の聲として

「いよ〳〵高木景遠君は此九月から此學校の歴史の教授と爲るさうで、而も今日拜命したヨ」。之を漏聞いた阿角の胸には……ソレは作者が言はずとも……ソラ交感神經で……

金錢の性質。

昔グリイスにマイダスと云ふ人あり。或る時神に恩を施せしかば、この神大に喜ひてマイダスに打向ひ、汝は我恩人なれば何事にても願あらば告ぐ可し受けたる恩の報として必叶へ得さすべし」と云ひけり。マイダス答へて「我身別に願とてもなし。只我手の觸るゝものゝ体の接するものを皆黄金に爲して玉はらば之に增したる喜無しと云ふに神は速にこれを諾しつ。扨マイダスは次の朝床を出でて衣を被れば、衣はたちまち金となりてその寒さ云ふべからず。口を嗽げば水も金となり、食物を口に入るれば食物も皆金となりければ、流石飢寒に迫りて詮方なく、再び神の助を呼び素の身に還らんことを祈り漸くにして自由の身となることを得けり。

右の物語は昔グリイスの世の作話なれども、今の世にも猶マイダスの如き人隨分多く、萬の物の中にて只金錢のみ貴き樣思ふ人少からず。凡て物の値打を數ふるには皆金錢の名を以てし、毎日の話にも某は幾万圓の身代あり、某の財産は何千圓ありと云ひ、又金錢を持てば何時にても望の品を買求むるを

得るが故に、金銭は格別に貴きものゝ如く考ふるに至れり。さりながら昔より云ふ通り飢たればとて金銭を食ふ事も出來ず、寒ければとて金銭を被る譯にも往かず。飢たるとき腹を充たすは食物なり。寒き時に体を被ふは衣類なり。金銭の貴き譯は飢へたる時これを以て米を買ひ、寒き時これを以て衣類を買ふことを得ればなり。もし米もなく、衣もなく、世の中の者皆金銭のみならば金銭程不用なるものはなかる可し。されば金銭の貴き譯は金銭の外に米、布などの如き、貴きものあればなり。是にて見ればおながち金銭のみ貴き譯もなく、金銭が他の品物と異りたる所は只その用ゐ方而巳。米の用ゐ方は飢を凌ぐにあり、衣類の用ゐ方は寒を凌ぐに在り。さて金銭の用ゐ方は物指を以て物の長を量るが如く、これを以て品物の價を量り、又サッにいこれを以て賣買の媒となすにあり。故にこの本の價は何圓と云ひ、此の衣類は何圓何十錢なりと云ふことは恰この机の長は何尺なり、かの帯の長は何尺何すなりと云ふと同じ、これ金銭を以て物の値段を量るなり。賣買の媒とは如何なることなりやと云ふに、例へば、東京の近在より呉服を買ふが爲に東京に

來るに、もし金錢なくして貯の米を以て呉服を買はんとせば、一反の呉服を買ふが爲に荷車一輛、人夫一人を雇ふて遙々米を積來らざるべからず。其の他多くの不便あれども一々これを擧げず。もし金錢あらば數十圓にても數百圓にても、自在にこれを懷にして東京に來り、容易く買物を爲すを得べし。かくの如く、金錢は物の價を量り、賣買の媒を爲すものにて、其の用ゐ方は米、布などに異なれども、その性質は異なることなく、金錢とても只一の品物に相違なし。

鷄卵の料理

鷄卵は滋養分に富み古來上下に通じて普く用ゐらるゝものにして我國の食物中には甚肝要なるものなり。常に用ゐるものにして其理を知らざれば其利用を計りがたし、これ記者がまづこゝにこの筆をとる所以なり。總て鳥の卵は其鳥の種類と畜養の法等によりて其性質同じからず殊に重さと大さのごとき甚相違することも常なれども其成分に至りては大差あることなし。通常白き部分と黄なる部分とより成れるものにして白き處は純粹なる蛋白

質と水より成り黄なる處は蛋白質油質硫黄及び水などゟ成る。健康なる人の鶏卵を常に用ゐるものは黄白共に之を食ふこととなれども甚しく衰弱たる人にありては獨り黄肉のみを用ゐるを常とす、但し黄肉はこれを白肉に比ふれば其味頗る美くまた消化することも容易なるを以てなり。其他風味ある料理などにては黄白を別々に用ゐることあり。例へば湯煮たる卵の黄肉を酸にて粘り、また白味を細に刻み、湯煮たる獨活菜など丶共に前の液に浸し用ゐるがごとし。

最普通なる卵の料理法は既に味を付けたる汁の中へ卵を割入るゝあり。この場合に於ては蛋白質の凝固によりて白肉が不透明となるに至るまへに之を食ふを適度とす熱の爲に全く凝固たるものに比ぶれば其消化甚だ易く味もまた美し。生卵は煮たる卵よりは消易しと稱ふれども煮すぎたるにあらざれば強在なりとも云ひがたく、また一には常に生卵を食ずる習慣ある人の外はこれを賞美せざるべし。或はまた卵を冷き汁の中に割入れこれを熱して其汁の沸騰や否や直に之を用ゐるものは其味甚佳なり。

次に卵焼の賞美すべき点は蛋白質は凝固といへども甚だ軟かにして其味の美きにありとす。我國の卵焼の料理法に於ては酒と和せて其容積を大ならしめ、葛粉を混ぜて其分量を増す等隨分或点に於ては進歩せるものなしと云ふべからず。また西洋風の料理にても種々の方法あるべしといへども彼我格別の差異ありとも思はれず、只我は植物油を以てこれを焼き、彼は動物油を以てこれを焼き或は彼にありては常に薬味を添へて用ゐるがごときはまづ其差とする所あり。磁器皿を以て炭火にて卵を焼く法あり、專ら「フランス」「メキシコ」等の地方より行はる。即ち厚き皿を少時間火上に於て熱め、次に之に「バター」胡椒塩等を入るれバ其皿の表面は「バター」の爲に滑となり、胡椒等にて甚香氣ある混和物を生ず。次に卵を此中に割込み、其黄肉の形を損せぬやうにしばらくこれを回へし、其両面ともに黄色を帯ぶるに至らしむべし。かくてこれを更に他の器に移さずして直にその皿より食せれバ急に放冷る患もなく、また其味も宜しと云ふ。

時としては生卵を刺衝剤に混ぜて風味を美ならしめ、消化を易からしむる

ことあり例へば葡萄酒と卵或は「ブランディー」と卵とを相混ぜて用ゐるがごときこれなり但し右の中葡萄酒と生卵を混ぜたるものを以て就中優れりとす或はまたこれを牛乳と混せて滋養分に富める食料を製することあり、然かれどももし牛乳にして上等のものなりせばこの混和は滋養と消化を進むると云ふほどのこともなかるべし。要するに卵は其味頗る淡泊よして而も滋養分よ富み兼ては消化易ければ健康なる人に用ゐるも病ある人に用ゐるも共に適當する食品と云ふべし。然かれども其成分たるや砂糖分澱粉に乏きを以て宜しくこれを含める食品を添へて用ゐるをよしとす。而してこれを用ゐるの時は特に朝飯の膳部に供ふるを可とす、但し西洋の人が朝飯の時に「パン」「バター」など丶共にこれを用ゐるは前の理によれるものならん。

卵はこれを長く貯蓄たればとて其品質を進むるものにあらず加ふるに時として腐敗して悪しき臭を醸し或は幸にこゝに至らざるも消化を悪くする患あるを以て成るべく速に之を用ゐるを宜しとす。然かれども萬已むを得ざる場合に於ては之を貯存て數日若くは數週間毫も物質の變化を生ぜざら

しむることを得るなり。これを石灰もしくは石灰水の中に投じ暗室に置くべし、尤も此法にては卵殻が脆くなりて破るゝ患あり。或はまた濕氣と卵と相觸れざるやうに注意して木灰の中に埋め置くも可なり。其他一時の假貯には「ヌリ」糠又は赤小豆の中に投ずるを以てこと足れりとす。要するに卵の貯蓄に於てハ常に之を暗き所に置くこと大切なり。

卵の良否を知ることまた肝要なり、即卵の兩端中大なる方を舌にて試み冷く思はるゝものは佳なり。或はまた日光或は強き燈火に透して見れバ半透明の狀をなし其中心の殊に然るを良品とす。或はまた食鹽一、水九の割合なる液の中に卵を投ぜれバ良品は沈むも少く悪きものは浮ぶ。

附言。本文に鷄卵は消化易しと云ひたれども其消化に要する時間ハ三時乃至四時なりと知られたし。

牛肉の良否を知る法

夏には諸食料品腐敗易き患ありて、時としては誤りてかゝる食品を用ゐて疾病を來す媒介となることを少からず。この際家政の司にある方々よく注意

ありたきことなり。良き牛肉は其色深紅にして、また之に附着せる脂肉も其色純白なり、肉の組織も緻密にしてたとひ指にて之を推すも其痕を残す事なかるべし。之に反して稍腐敗に近きものは其色鮮紅にあらず、其脂も稍暗黒色を呈し肉の組織もまた堅固ならず、故にもし指にて之を推せば其凹みたる痕は長く失することなし。これ肉の組織其弾力を失ひたるが故なり。其他罐詰の牛肉などにては一旦罐を開けば腐敗すること甚速かなるを以て成るべく速に食料に供すべし。一たび開きたる罐の食料を保存せんとするは却てこれを捨つるに同じ、家政の手品の妙を得たるものにあらず。

飯焼改良法

御飯を焼くには白米を磨で釜に入れ、御飯に炊上げるまでの時間を成たけ短くして手早いのが専一でありますが、夫には前晩に磨で置くと手廻のよい上磨置の米は炊てから饐るのが晩いから暑中などは最よい代りに甘味が減じて磨立ほど甘くありません。左れば時間を少にして飯を蒸上げるには火を強くして釜の尻へ火力の強く當る様にし、又なるたけ釜の尻を磨き滑く

して置くが宜う御座います。また火力を強くする時は釜と竈の間へ瓦の欠か何かを挾みて火氣は十分に漏れるも火先は漏れぬ位を度として釜と竈の間を少し透せるが宜し。斯樣にする時は通例の炊方より半分も早く炊るなり。＊＊＊また家に因りては＊＊竈に銅壺を附ける人あれど、是はなはだ迂遠な考にて、湯か入用ならば別に沸した方が早く、夫よりは前に述ぶる如く火力を釜の方へ集め、釜も無き竈を溫めぬ樣にするが宜し。また飯の焦附を恐れ、鐵葉板を釜底へ入れる者あれど、是また薪が澤山入りて損なり。また改良竈とて前の口に蓋をするは至極宜いが後の烟出が鐵にて釜の火氣を吸ひて損なるが故にいまた十分とも思はれぬ＊＊＊前に述ぶる如く釜と竈の間を隙かせる時は忽ち沸騰つが故に沸騰たらは薪を減じ、暫くプップッと音して湯氣の音が松風の如く變ずるを待つて釜を外し、四分間ほど蒸して置き釜よりお櫃へ移す前に手早く掻廻して大氣に觸れしめたる上お櫃へ移すべし。斯樣に爲れば焦附かず、冷飯にして湯漬にしても濁らず味も極めて甘しと云ふ話なれは皆さん試して御覽なさい（明治二十年七月二十二日讀賣新聞摘要）

迷の淵(前号のつゞき)

美妙斎主人補譯

第四

いよ／＼風は吹暴れて
箭を射る如く雲を吹く。
雲の縮襖すきもりて、
をり／＼薄く睨むなる
弓張月の影はしも
泡に咽べるあらなみに
揉砕かれてがり、ばでり。
埃にあらぬ路傍の
泥を蹴立てゝ後方より
蹄の諸聲音すなり。
すはや追手と知るからに、
姫はたまらず、「やよ急げ、
やよ急ぎてよわたし守。
たとへ嵐は強くとも。
怒れる父を見んよりは
怒れる濤に乗らんこそ
優りたらめ。」と急立つる
聲に船人猶豫せず
櫂は押せどもあら轉情、
其力ヒとてハ無かりけり

第五

涙は益々腮を張り、
羽搏つ鳥も稻づまも
今ぞ馳着く姫の父
乱れて霞むおぼろ月。
子故の闇の消迷ふ
霞む河面見亙せば、
落葉に宿る冬の蟻
揺上げられつ、落さるゝ
猶いぢらしや、左手まて
身をば右手にてダキ茗荷、

第六

怒も今はかなしみと
娘罪をばゆるすべし。

風はいよ〱羽を搏つ。
及ばぬ迄の速力もて
空にも狂ふ雲間より
我も乱るゝ胸の月。
我も眼ハ霞むなり。
あはれ、我子は、憩無殘、
風にもまるゝ風情にて
危き中に在りながら、
救援の程をコヒ人の
冥加をこそは祈るなれ。
變れかて親は氣も半亂
とく立歸れ、立かへれ。

あら高浪の……すは見よや……
やがては船もくだけんづ、
思計らば……こや娘、
かねて親にも優しかる
罪は赦す」と呼子ども、
我子は波に呑ませ去と
程もアラ涙情なみ、
雨と涙とにつゝまれて、

やがては船も沈まんづ。
父の心のかなしみを
疾く立歸れ、喃むすめ、
心根なりし身ならずや。
聲は嵐に呑まれても
身悶しつゝ立騒ぐ
涙と降るか空の雨、
姫は……無殘や……父へ泣く。

いらつめ第一号發行なりしとて成美社よりおくりこされたるを見るに女子の令徳を進めむとするの目的にて、近頃いまだ見ざるいと面白き雑誌なり。其雑錄の中に詩を歌に譯する事を載せて記者の作とも二三首のせられたるが、かいなでの手際にあらず、いづれも一ふしありてをかしければ愛のあまりに余もまた向に古き詩の意をうたひつることのあるを思出でゝこゝに其

長歌一首を記して記者諸君の一笑に備ふ。あな鳥滸がましの業や。

東皐薄暮望（唐詩選五言律王績作）の心を

天下る鄙のなかにわがこふる千重の一重もなぐさもる方もやあると東の岡のあたりゆ夕暮に打出でゝ見れば秋の風雲井に吹きて紅葉の匂へる山にあから引く日もかくろへば総角の小牛たひたて、己がゑゝ家路にむかひ、狩人の小鷹手に据ゑ馬なべて歸るもあれど知る人し絶えてあらねば言はむ術せんすべしらに、たもとほり只一人して負征矢のそよと成迄なげきつるかも。

美濃　三浦千春

評、長歌擬不徹てふ原詩の結句をそれと無く竊して歌の初の方に匂はしたる御手際なべてならぬ

調子外の戯歌は徒よ風琴のしらべを亂すのみ。

紅葉山人

いち都めにもてはやされむ風琴は　そのひとふしの美妙なるゆゑ。

親睦

是は中教正柴田花守翁の作にて金蘭會第四會に於て謳はれたるものなり。

天地の中にはらめる人のみは　皆はらからとしたしみて
信を盡くし、義をまもり、　友のまじはり厚くせよ。
契りし言をたがへぬは、　親睦むすぶ糸となり、
表向を飾るいつはりは　交際をたつ斧となる。
心無きてふ草木だに　來ん春見んと契りたる
花は梢に笑みて待ち、　野邊の千草は白露を
結びて花を紐を解く。　人はよろづの長なれば、
天の眞の道をふみ、　友のまじはり厚くせよ。〱

許　流石に優ある作なり。　但し、題こそは親睦と云へ、全体の處「信」を眼目とし、肝要なる「親睦」をば二の町としたる體裁あり。　かくては和歌にて云ふ落題なり。　影を改めなば難なからん。　如何。

金蘭會新作の唱歌

蘭てふ草も金をも　末を契れる友だちの
其眞心にたぐひつゝ　むつみあふこそ樂しけれ。
花の梢に鳥ぞ啼く　花の梢に蝶ぞ舞ふ。
己がまに〳〵打興じ。　共に遊ぶぞ面白き。
君が代に遊ふ喜さは　思ふ友だちよりつとは、
眤みかたらふ赤星の　飽かぬれ今日の團居なり。

評　是ぞと云ふべき氣韵も無し。第三節の第二句「つとひ」とあるは「つとひ」てふ意か。さらば何故「つとひ」とは爲で故さらに「つとむ」とは爲しか。

○婦人の頭髮を長くする法。

此程東京人類學會の幹事坪井正五郎君は同會に於て爲されたる談話中八

丈島の婦人の頭髪の長き理由を説明して。

「サテ島々殊に八丈島の婦人の髪の長いのは何故で有りませう。氣候で有りませうか。食物で有りませうか。共に然るべしとは思はれません。好き椿の油を付けるのに因るとか、水の性だとか云ふ人も有りますが、元來毛の延びるのは既に成長して皮膚の外に出た部分が次第に長くなるのでは無く、根の球の中に在る乳狀突起の表面の細胞が常に數を增して段々に毛の纖維部を作り、既に成長した部分をば上へ上へと押し上げるのですから水や油に直接な關係は有りません。然らば何が原因でございませう。私は疑も無く、髪毛の取扱の好いのが源因だと思ひます。大島にはシマダ、インボンジリ、と云ふ二種の髷、新島にはカワラ、ムスビサゲシモダの三種神津島には結び髮計り、三宅島よはシマダカウガイマキの二種、八丈島にはシマダユヒと結び髮の二種の髷が有る丈で何れも堅い油を付けることも無くきりきりと縛り付る事も有りません。此樣に結び方が手輕ですから、解いて洗ふたり、梳たりするのも隨て容易でございます。何れの島の婦人も一日一度位は必ず髮を解て梳

く樣子ですが、八丈島の者は通例が一日二三遍多いのは七遍位も梳いては結ひ直すのです。家に居る時も梳き、外に出る時も梳き、山よ登る時も濱に在る時も用の間にも、使の途中にも、時を撰ばず、所を嫌はず、思ひ付きさへすれば櫛を使ふと云ふ有樣ですから櫛は常に手放さず頭に差し、小娘抔は櫛を落さぬ爲に長い糸で髷に繋ぎ付けて居ります。如此譯故、髮毛は自由に延びて天然の成長を全するのでござります。八丈の婦人で東京へ來て數年間固い髷を結ひ付けて居たらバ古い長い毛は追追よ脫け、新く生へた毛は皆短く元來身の丈に餘た髮が辛じて膝に達する位に成て仕舞たと云ふ者さへ有りますから、生れ付き髮を自由にして置くのと子供の時から固め付けて置くのとでは長短の差を生ずるのも道理でござります。東京の婦人でも常に結び髮にして置いて一日に二三遍位も梳いたり、洗たり爲るならば八丈の婦人程には至らざるも從來の者よりは長くなるでござりませう」と語られたりと云。

○日本婦人束髮の評。外國女流の內にては我國婦人の頭髮の結び方を批

評するもの多く其言に曰く「日本の婦人は近頃頭髮の結方を改めて西洋風に爲したる由よて衞生のためとか唱へ、油をも用ゐざる趣是は近頃心得難き事なり。西洋婦人の如く帽子を被るなれば油をつけぬ方却てよろしけれども何も被り物無き頭髮には是非とも油を付けざるべからず。頭髮に油氣あればば日光を返射する事を得ず、眞に腦天を燒付けらるゝの恐なし。然るを日本の婦女子ハ束髮に被り物無くして油を付けざるとハ衞生を欲して衞生に背きたるものと云ふべし。今後謀を改めて油を用ゐるやうに爲すか、或は帽子を被る事を爲るか日本服に帽子もあまり感心すべき風ならねば油を付けて頭腦を衞護する方然るべし。迚もの序に全く改良して以然の結髮に直しては如何。日本婦人の束髮ならざる髮の結方を奇麗とも上品とも誠に以て申分無し。數百年の昔より沿革よ沿革を重ねて人目に適するやうにと工風を凝らしたる結果と見え自然美術の旨にも合ひて微妙言はん方無し。我等西洋の婦人も日本の結髮風を結びたきは山々の願なれども社會の風とて帽子を戴く習俗あれバ折角結上げる甲斐も無く又並外れて帽子を去るなどの異

風を爲す譯にも行かねバ詮方なく其風を習はざるなり。日本の婦女子は帽子を被らずともよろしき風俗の中に在りながら今迄の結髪風をば惜氣も無く廢滅して束髪風に惡變はりせしこそ返すくも殘念の至りなれ。乘り掛けた車今更中止も如何と云はゞ切て油を付くる丈にても斷然復古の謀に決心あらまほしき事にこそ」と英國にても米國にても婦人仲間にては口々に語合ひて日本留學生の歸朝する者を見掛くれは呉々も此由言傳呉れよと申せものありしと云ふ。

（明治二十年七月三十日、時事新報摘要）

論説

この欄に載する所は必しも本社の定説にあらず

如何にして女子の地位を高むべきか。（承前）

井上十吉

世人は女子の教育こそ今日社會の病を醫する的藥なれと想像れり。然れども男女相互の關係より起こる務をば男女一樣に負ふべしと考ふる論者は斯かる判斷を下さざるべし。よしや必要ありとするももつともその必要を減ぜるものは女子にあらずして男子にあり　女子を冷遇せずしてこれを愛

敬するとは教育上最要の点なりとす。男子にして實際この行爲なき以上は社會改良の經畫は徒爲にならんのみ。世人は兎角その事柄さへ美ければ常に一蹴して仕遂げ得らるべきものとのみ一圖に思ひ込みその變化は當時の社會に實際適するや否やを顧みざるあり。男女同等は文明の極度に達したる想像の社會の有樣なることは確なれども、吾人はかゝる黃金世界に達する前に過ぎねばならぬ順路を忽略にすべからず。徒に空想を目的として事業をなすときは恰も空中の蜃氣樓を追ひて終に空しく回るの嘆あるべし。

女子に高等教育を授くる事の可否に就きては猶豫して決せざるとの少しとせざるは遽に束縛を解きて西洋の思想をもてその心を開放さば時としては天晴女丈夫を出す恐あればなり。女子の美德と言へば直に心に浮び來るものは溫良貞節の美德あり。然るに高等教育を受けたる女子にしてこの諸德を缺きたるものあり、女子は百藝を具ふるも女德の缺くる處あれば人の愛を博するに足らず、かゝる極端の場合は高等教育の偶然の結果に過ぎずと雖、世人は却てこれを以て自然の結果となす。兎角世人は格段なる場合を取

て一般を槩す傾あるものなれは高等教育を受けたる女子にして偶逢業の行あるときは罪を高等教育に歸するも餘儀なき次第なり。

女子の地位を高めんとして只管それを女子に求むるは無益の事といふべし。　如何となれば女子はわが意を通すよりは寧男子の意見に一致するの傾向あるが故なり。　諺に女子は男子の規矩に從ふといふも強道理なき語にあらず、男子と諧和ならんか爲その心力を盡さんと欲するは女子たるものゝ常常の心掛なるべし。　女子は男子の心情の移り變りを見ると甚鋭敏にして、若かくすれば男子の愛を固むるに足ると知れば如何樣にも己の身持を取繕ふものなり。　かかる有樣なるか故に、男子にして女子の教育を嫌ふ間は女子にも熱心に學問せるの心起らざるべし　故に當時の平準よりも高く又男子の一般の需要よりも高く女子を教育するは恰需要なき貨物を市場に齎すが如し。　故に女子は改良の事業に於ては自率先者となることを望むべからず。男子まづ改良の必要を知りてこれを振作さざるべからず。　男子は常に社會の開進の部分を代表するに、女子はこれに反し常に保守の部分を代表せり。

故に女子を今日の奴婢の有樣より救ひて永久自由の身となさんとするには男子自その主唱者とならずばあるべからず。

世中には女子の未來に望を措かず、夫に屈從倚賴するをもて女子正當の道と考ふる一轍論者も少からず女子ハ年久しく卑屈に慣れたるをして男子と同等の地位に立たんとの望は愚、男子の壓制を脱せんとするものさへ稀なるに至れり。かゝる有樣なるか故にかゝる論者の出るも無理ならぬとなり。是迄女子の敎育は萬事夫に從順なることのみを敎へて曾その力を顯その機會を與へざりしが爲めに吾人はその心情の深淺を測ること能はざりき。女子には一種特有の美德ありてこれが爲に家庭の間に言ふべからざる情味生ずると共なり。然るに所謂女子六德の中にこの美德を數へざるは實に奇怪なる事共なり

かくのごとく女子は敎育上、夫に屈順すべきとのみを敎へられ、剰へ七去など不當の處分を受くることとなれば、その不利益は言はん方なけれども、妻となり子となる時は夫妻親子の間に愛情自然に生ずるものなり。この愛情の

絆なかりせば夫たり父たるもの私欲に駈られて身を亡し家を破らざるもの稀なるべし。然らば女子は社會の風儀を撿束たる恩人といふべし。わが邦の男子は花に狂ふ蝶の如く、榮花に飽けば去りて櫻花に就く。女子は籠の中の鳥の如し、操縱人の意中にあり。かゝる間柄にも女子は常に舊時の精神を固く執りて動かず。もし女子にしてこの特操なかりせば男子は己の匪行より起るべき結果を逃るゝを能はざりしならん。誠に女子はよき仕來の保存者といふべし。然るに世間にては男子の不身持を見てはこれをつくろひながら、女子の身を持崩して落ちぶれたるものを見てはこれを快しとせり。諺にも貞女は二夫に見えずといふなるに、英雄は却て色を好むの癖あり。

浮世の洋を航るには風靜に波恬なる時のみあらじ烈しき暴風高き潮にその船路を妨げらるゝとあり。かゝる逆境に遭遇たる時、これを慰めて落膽せしめず更に勇氣を鼓舞しむるものは女子の力にあらずや。されば吾人をして女子の美德あるが爲に女子を愛敬せしめよ。女子を以て男子情慾の犧牲として見るなかれ。男子の跋扈なる行爲と節制なき慾望を懲し鎮むるに有力

なるわが一体の骨肉と見よ。又生涯永き世渡の路連れ案内者としてこれを愍めよ。然れども徒に空想に支配せられて、女子の地位を高むるの目的が吾人の時代に於て仕遂げらるゝものとの妄想を抱くべからず。何事にても大事業は一世にて成就すると能はざるなり。新文明を創立るとは吾人の勉むべき處なり、これが基礎を固むるにはこれを子孫に委ねざるべからず。然らば女子の地位は女子を愛敬するによつて定まることを心に銘し、事業の完成を來世に期せよ。吾人は記憶せざるべからず、身に巴黎め新様の綺羅を裝ひ雲裳扁々として春殿に舞ふも未文明の眞相といふべからざることを。また記憶せよ、女子の一部分なる貴女子の有様を以て一國の文明と計るべからず一國の文明は一般女子の有様如何にあることを。かの大陽の東海に出でて次第に天心に至るが如く、暗黒の時代より進みて國光を輝かすの時あることを期して待つべきなり。然れども道途嶮峻ければ躁がしく進むべからず歩毎に踐み占めて徐徐と進むべし

女子諸君に望む　上野銀女

卞和の璞も磨かずば誰かよく其美玉なるを知らん、楚后の產めると云へる鐵圍も干將莫耶の鍛淬を經ずば銳利の劒となるべからず。此鍛練琢磨の術は如何なる器物を作るにも必用の事なれども取分け人物を造出すには最必用にして闕くべからざる業なり。

人の氣質の鍛練と其智識の琢磨とは生涯の事業にして殆ど死に臨むまでも已まざる事なれども、其最大切にして最困難なるは幼稚の時にあり。譬へば園丁の果樹を養ふが如し其嫩芽を發そる時に當り、一たび培植の法を誤れば其美花を開き良菓を結ぶを望むべからず。故に幼時の教育よして其宜しきを得ざる時は終に其人の生涯を誤るに至らん。

この大切にして困難なる事業を重立ちて請負ふべき名工良冶ハ慈母に外ならざればこの慈母たるべき女子を教育するは教育中の要務にあらずや。

されば明治の御世となりて百事面目を改むると共に女子教育の方法をも改められ、男子と仝じく小學に入りて普通の教育を受けしめらるゝ事とはなりぬ。されど其時は猶小學教育に止まりしが、追々當路の方々が女子教育を

愈範振するに心を用ゐらるゝ折から畏くも我が叡聖なる皇后陛下の早くも爰に御心付かせたまひ、明治七年文部省に仰せて女子の師範學校を設立せさせ給ひければ女子の教育また一歩を進めたり。

然るに當時の社會教育の本旨を知るもの少なく、教育といひ學問と云へば一向に書を讀み、字義を解する事の如く思誤にて世の女子を持てる人々は皆謂へりて「今は學問の世中となりたり。女子たりとて學問せさせではあるべからで」とてこゝの和塾に彼處の教會に通はして漢籍を講せしむるあり。洋學を修めしむるもありしかば、或は少しく漢語を知り、洋語に通ずれば傲然自得して或は父母の厭制を咎め、或は男女全權を口實にし皮相管見を以て我儘を自由と心得、粗野を活潑と思取り、遂に婉麗閑雅の婦容を失ひ、温良貞淑の婦德を欠く者あるに至れり。

かく云へば女子の見識は餘りに淺はかなるが如くなれども、凡物一利あれば一弊之に伴ふは數の免れざるものにして從來女子の教育は多くは俗樂裁縫、習字等の手藝に限り人に接する事甚少くして生涯幽鬱の中に世を送りし

ものが忽にして數多の男女に接し、少しく見聞の廣まりしかば從來壓制を受けたる反動竟に此不良の結果を來したるは亦是非も無き次第なり。(以下次號)

餘興

一 新作謎

伯父の妹にして妾の伯叔母ならずば其婦人は妾に如何なる關係を有か

二 眼は有れども只一ツ
物は見えねど是こそは
無くて叶はぬ要あれ
心は無けれど浮やかなり
又は婦人のなぐさみと
斯く云ふ我は誰ならん、
如何なる事を爲るとても
智慧はあらねど鋭くて、
時に因りては活計の資
なるは此身の徳にこそ
見る人當てゝ見たまひね

西洋手品の法

一 見物人の内なる人をして紙に文字なり文句なり密に記さしめ又は時計

の針を勝手の處に移直かしめ、扨燈火を吹消して四近を眞の暗と爲し夫より見物人より右の紙なり時計なり受取り、紙に在る文字又は時計の針の所在を誤たず言當つる。

其法は僅に燐を用意すれは夫にて宜し。燈火を消したる後燐の光を見物人に悟らしめぬ樣にして、扨紙の文字にもせよ、時計の針の在處にも爲よ、讀むべし。

二　少女を籠の中に入れて籠に蓋を爲し扨見物をして處嫌はず籠の外より刀を刺透さしめ籠の蓋を、開けば籠の中には少女は在らず。又籠の中に少女の無きを確と見物に見せし後再籠の蓋を開けば少女ハ悠然中にあり解は次号。

御投寄よ係る新作の謎にしていらつめに掲載さるゝか或は六題以上御解當の諸君には雑誌一部進上すべし

社告　第二号には石橋雨香氏の寄書をも掲載可致旨廣告仕候處印刷後の精算に因れば何分丁數も意外の多數となりしため作不本意右掲載は第三号に相譲候

新深磐次著
金港堂
發兌書

日本普通文如何

一冊　定價金二十錢郵税金六錢

世ニ本邦普通ノ文字ヲ改ムルノ説多ク、又普通文章ヲ論ズル者ナキニ非ズ、然レ𪜈文字ヲ改ムルハ一朝一夕ノ業ニ非ズ、文章ヲ論ズル者未ダ則ルベキ説ヲ立テズ此書本邦普通文ヲ論ズル精細ニシテ確實ナリ因テ以テ普通文ヲ改良スルノ指針トナスヘシ蓋シ此書一度出デテ本邦普通文ノ運命長久ナリト云フベシ江湖ノ君子一讀シテ其實ヲ知リ賜ヘ
小池民次著

○家庭教育

全一冊　定價金四十錢　郵税金拾二錢

此書は當時の教育に基きて作りたる家庭教訓なれば人の父母たるものは常に能く是を讀み置きて其の子供を教へ導くべし然るときは其の子家に居ては父母の教を守り小學校に入りては其の學科を受くること器を造て物を入るるが如くいと易かるへし然のみならず成人の後賢き人となるも愚かなる人となるも其本は家庭教訓の善き悪しに由るものなれは子供持ちたらん人々は皆一本を備へ置きたきことにこそ

中川元譯述

文華の燈

教育美談　一卷○定價四十錢○郵税金十二錢

本書は兒女教育の要綱を原著者エルチスト、レグーウベー氏が自から愛兒と育成したる實跡に擬して叮嚀懇切に説き示し恰も彼の有名なるルーソー氏のエミールに稍や類したるものなるを中川君博雅の筆を以て極めて平易に極めて小説體を主として飜譯せられ加ふるに傍訓を附したれは童蒙婦女子と雖も一讀忽ち其意を解し深く興味に入るの間自から教育の要旨に通ずるの趣ありて苟も小學の教育に從事する諸彦は勿論世の慈父たり慈母たらん者坐右必ず一本を欠く可からずと云ふ

東京本町三丁目
金港堂原亮三郎本店

大坂北久寳寺町
金港堂原亮三郎支店

●駒木根貫一郎先生編

●毛糸編物法

●洋製頗美本全一冊　一千部限大減價　卅五錢●郵税十二錢●切手代用二割増しの事

社會の文明に進むに隨ひ專ら文物に新奇を鬪はし改良を加へ特に生糸編物の如き當時世上に流行せる實に盛なりと云べし抑も本書は駒木根君か先年米國に遊學せられし時修學の餘暇親しく米人に就き學び得歸朝後數年間當地

女學校の生徒に授くるの際自から筆記せられし處の者にして最初は連鎖の編み方より帽子涎懸巾着靴下薬物肩掛等に至る迄數十種の方法を記載せり其文の平易詳説せる其圖書の緻密明晰なる苟もいろはの文字を讀み得るの人は一見の許に了會して直ちに之を編み爲すを得べし乞ふ陸續御購求あれ●此書により若し編み得ざるときハ編者自から其責めに任す●着金の即日送本す

發賣所 大坂中之島常安橋北詰一丁西入北側 川井美津書肆

英國ジョーセフ、シリット原著
日本渡邊修二郎譯撰
八月發兌 全一冊價五十錢

西洋女範

WOMANHOOD

全編目錄

第一章 婦女の本分
第二章 婦女の敎育
第三章 婦女の行狀
第四章 婦女の勢力
章五章 婦女の愛情
第六章 婦女の惑弊
第七章 婦女の服務

出版所 東京根岸金杉村二百六十三番地 贊育社

英國ドイグ夫人著井上勤君譯

○細君の友 全一冊定價五十錢

○西洋束髮秘傳 附 化粧秘傳 全一冊
石板縮畵廿七入正價金廿五錢

渡邊鼎君著
束髮獨案内 全一冊 定價金十五錢

鳥居忱君著
音樂道のしるべ 全一冊 定價金四十錢

文部省御藏板圖書和漢洋書籍之外小說類販賣所
東京神田
右大賣捌所 團々社支店